

2025年度 マネジメント学部
一般選抜 A 日程問題

国 語

2025年 2 月実施

出 題 科 目	ページ	解答番号
国 語 (100点)	4 ～20	1 ～ 28

注 意 事 項

- 1 選考開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- 2 問題は 4 ～20ページである。
- 3 選考中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。
 - ① 選考番号欄
必ず選考番号（数字）を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。
 - ② 氏名欄
氏名及びフリガナを記入しなさい。
- 5 必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあるので注意すること。
- 6 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、 と表示のある問いに対して⑤と解答する場合は、次の(例)のように解答番号35の解答欄の ☐5☐ にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
35	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☒ 5 ☐ 6 ☐ 7 ☐ 8 ☐ 9 ☐ 10

- 7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

国

語

(
解答
番号

1

～

28

)

I 次の文章は、ドナルド・トランプが第四五代アメリカ合衆国大統領（在任二〇一七～二二年）に就任した後で書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

多かれ少なかれ、民主政治とは、「真実」や「事実」を基準とする政治などではなく、イメージ操作によって多数の支持を調達する政治である。つまり、「フェイク」と「ポピュリズム」は民主主義の本質に属する事項なのである。したがって、^A トランプが口から出まかせ（フェイク）を話し、大衆迎合的（ポピュリズム）だから、民主政治の敵対者であり、その破壊者である、という批判はあたらない。

むしろ、トランプ大統領の誕生によって、いわば「むき出しの民主主義」が現前化したといわねばならないであろう。「フェイク」と「ポピュリズム」を駆使した権力の奪取という「むき出しの民主主義」こそ、今日のアメリカのリベラルな民主主義の帰結なのである。だから、それは確かに「民主主義の危機」であるかもしれないが、その意味は、「民主主義が後退している」からではなく、むしろ「民主主義が急進的に展開している」からといわねばならない。

われわれは、民主主義に対して、「言論を通じた討議によって真実に接近する政治である」などという^B 外皮を被せて虚飾で飾り立ててきた。あるいは、「国民の意志という何ものかが政治的に実現される仕組みだ」などという^C 偽装を行ってきた。

トランプはその覆いを剥がしたのだった。覆われているものを剥がすことが本来の（古典ギリシヤ的な意味での）「真実（アレテア）」＝覆いを剥がすこと」だとするならば、トランプは、「真実」を語ったことにさえなる。ただそのやり方が、トランプ自身がまったくダイ^⑦ タンにフェイクを述べ立てることによってであった。

これはアメリカだけのことではない。ヨーロッパでもほぼ似たような政治状況が生まれており、イスラム系移民をターゲットにした^⑧ ハイガイ的な政治状況が生み出された。ここでも「フェイク」と「ポピュリズム」という「むき出しの民主主義」が^a している。ヨーロッパにおいても、今日、ポピュリズムは民主主義に敵対する非難語になっているが、ポピュリズムをその言葉通りに理解すれば、ポピュリズムとは、民衆の要求や情念によって政治が動くこと（民衆主義）であり、ポピュリズムを民主主義と対立させることなどできるはずはない。民主主義はその本質にポピュリズムを^b しているのだ。

したがって、アメリカにおけるトランプ大統領の誕生が民主主義への^⑨ キョウイを生み出したのではなく、すでに「何か」がうまく機能しなくなったのである。そのために、民主主義という政治体制がトランプ大統領を生み出したのであった。トランプが、あるいはヨーロッパの「ポピュリスト」や「極右」と^c される右派政治家が民主主義を危機に陥れているのではなく、民主主義が本来持っていた危機的様相が現実化することによって、トランプ現象が発火してしまったのである。^D 民主主義をかくらうじて機能させていた「何か」が崩れ去った、ということである。

だが、いったい何が機能しなくなったのだろうか。アメリカにおけるトランプ大統領の登場を中心に今日の民主政治の危機的様相を分析した『民主主義の死に方』という書物の中で著者スティーブン・レビツキーとダニエル・ジブラットはこう述べている。

アメリカ政治を機能させてきたものは何か。それは、「相互に対する寛容」と、「組織的な自制心」であった。対立者への寛容と、自己主張における自制心は、ともに不文律である。それは憲法や法に書かれたものではなく、われわれの日常的な生活と社会的な意識とともにある「目に見えないルール」であり、暗黙の規範である。いいかえれば、しばしばいわれるように、立憲主義や法規範、高い市民意識などが民主政治を支えているのではなく、寛容と自制心という不文律、見えない規範がそれを支えている、というのだ。

私は、そこにもうひとつ「手続きへの信頼」をあげておきたいが、これもまた不文律である。この「手続きへの信頼」には、政党への信頼や、政治システム（政党政治、議会政治、正当な内閣、投票システムなど）への信頼も含まれる。そして、これらの不文律こそが民主政治の基盤であるという事情は、特にアメリカ政治に限らず、民主政治一般についていえることであろう。

そうだとすれば、この見方からは、^E民主政治に対するある種のリアリズムが浮かび上がってくる。「相互的な寛容」や「組織的な自制心」や「手続きへの信頼」が民主主義を支えるとしても、これらの「暗黙の規範」そのものは、民主主義の中から生み出されるわけではないのだ。いや、政治的でさえない。それは、ひとつの国の自生的な文化や歴史的経験、社会的な意識の中で形成されるほかない。「習俗（モーレス）」というほかない。「コモンセンス」つまり「常識」である。

だが「モーレス」は、その国によって違っている。そして、それはその国や地域の歴史や文化や宗教意識によって形成され維持される。その「モーレス」が暗黙の「モーラル」を積み上げる。それこそが、この場合には、アメリカの「潜在的文化」であり、アメリカ社会を支えている「隠された価値」である。

それが失われた時、民主主義は、[⊕]トタンに、デマゴーグ（大衆扇動者）を生み出し、独裁政治を生み出す土壌となるだろう。そして、しばしば、過剰なまでの民意の尊重や自己主張の権利や平等性への要求などという「民主主義的価値」こそが、これらのモーレスを崩してしまう。民主主義が、それを支えてきたモーレスを崩してしまうのだ。こうして結果的に民主主義は破壊されるのだが、それを生み出すのもまた民主主義であってみれば、それは破壊ではなく自壊というほかない。

この場合、大事なことは、次のことである。「寛容」や「自制心」や「手続きへの信頼」の衰微が民主政治の崩壊を招く、といった時、すでに民主主義は「真実」や「事実」とは無縁の政治であることが含意されているということである。なぜなら、「寛容」にせよ、「自制心」にせよ、「手続きへの信頼」にせよ、それらの道徳的価値がなぜ必要かといえ、政治は、確かな事実や真実によって動くものではないからだ。そこには、客観的で誰もが納得する事実などというものは存在しない（あるいは重要ではない）からである。政治が取り扱うのは、事実というより価値だからである。

人々は自己の利益や価値の実現を求める。そして利益も価値も衝突する。そこに民主政治の本質に関わる核心があつて、それが意味することは、民主主義にあつては客観的な「真実」や「事実」など当初から問題とはされていない、ということである。そうではなく、民主主義の根底にあるものは、「寛容」や「自制心」や「手続き」によつてしか緩和することのできない「敵対」である、ということなのだ。

ある種の政治学者たちは、ギリシャの古典的民主政を持ち出して、民主主義とは本質的に「アゴニスティック（闘争的）」なものであるとし、「アゴーンの民主主義」という言葉を使っているが、それはある真実を述べている。ただ、そうだとすれば、民主主義を **d** するのは相当に難しくなるであろう。民主主義がかるうじて機能するには、この敵対者の間の権力闘争が、せいぜいのところ「むき出しではない権力闘争」になればそれでよしとしなければならぬからである。

したがつて、仮に民主主義を言論による政治だとしても、ここでは、言論は常にある観点から語られる。いやある観点からしか語りえない。言論の客観性や事実性が問題ではなく、権力操作（多数を支持者にするという操作）の観点からあらゆる言語が吐き出される。野党の政治家がしばしば「事実を明らかにせよ」と与党を ^④ キュウダンするのも、実際には、「事実」へ訴えることによつて大衆への説得力が高まると考えているからだ。それは権力政治なのである。言論は充分に権力闘争になりうる。

とすれば、政治的言説は、少なくとも民主政治においては、まず基本的にはすべてがフェイクというほかないのであり、政治は、たえず、その本質であるデマゴグやポピュリズムへとなだれ込んでしまうであろう。そのことを前提にするからこそ、対立者への「寛容」と自己自身への「自制」と制度化された「手続きへの信頼」が必要とされたのである。それらがかるうじて、民主政治の根本にある権力への熾烈な欲望を「むき出しではない権力闘争」へと置き換えてきたのである。

（佐伯啓思『近代の虚妄』）

問一 傍線部⑦～⑪の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は⑦―1、

①―2、⑦―3、⑤―4、④―5。

⑦
ダイタン

1

⑤ ④ ③ ② ①

世の人のシンタンを寒からしめる。
ヒタンに暮れる。
一年の計はガンタンにあり。
タンカで病人を運ぶ。
水墨画のコタンな味わい。

①
ハイガイ

2

⑤ ④ ③ ② ①

多くの偉人をハイシュツした名門。
産業ハイキ物。
障害物をハイジョする。
ハイグンの将は兵を語らず。
寺院の宝物をハイカンする。

⑦
キョウイ

3

⑤ ④ ③ ② ①

丁寧な対応にキョウシュクする。
キョウハクの罪に問われる。
富国キョウヘイを唱える。
キョウジュンの意を示す。
ヘンキョウの地に赴く。

⑤
トタン

4

⑤ ④ ③ ② ①

すべてはトロウに終わった。
トホウに暮れる。
前近代から近代へのカト期。
心境をトロする。
出世した友にシットする。

④
キユダン

5

⑤ ④ ③ ② ①

物資がキユボウしている。
ジキユウ自足の生活。
話し合いはフンキユウした。
キキユウに乗って空へと上昇する。
悲報を聞いてゴウキユウした。

問二 空欄

a

d

に入れるのに最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じものを繰り返して用いてはいけません。解答番号は a | 6、b | 7、c | 8、d | 9。

- ① 指弾 ② 擁護 ③ 逸脱 ④ 胚胎 はいたい
⑤ 跋扈 ばっこ ⑥ 逡巡 しゅんじゅん

問三

傍線部 A 「トランプが口から出まかせ（フェイク）を話し、大衆迎合的（ポピュリズム）だから、民主政治の敵対者であり、その破壊者である、という批判はあたらなさい」とあるが、どのように言えるのはなぜか。本文全体の論旨を踏まえた説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 10。

- ① 現代人は民主主義に対する誤った観念を抱いていたが、トランプはそうした観念を正すために、あえて民主主義を覆っていた覆いを剥がしただけであり、したがって彼の言説を口から出まかせだとして否定することはできないから。
- ② トランプの発言がフェイクであり、その政治的姿勢がポピュリズム的であることは事実だが、彼は民主主義を急進的に展開させているだけであり、そうした展開の先には民主主義を超えたあるべき政治のあり方が見え隠れしているから。
- ③ フェイクもポピュリズムも実体のない曖昧な観念だが、民主主義を支えている寛容と自制心、手続きへの信頼といったものも実体のない不文律であるため、フェイクやポピュリズムと民主主義とを敵対するものと見なすことは難しいから。
- ④ 民主主義とは、真実や事実を重視するものではなく、民衆の要求や情念に応えるようなイメージを用いて多くの支持を獲得し、異なった価値や利益の実現を求める敵対者との闘争の中で政治的権力の奪取を目指すものだから。
- ⑤ 現代の民主政治において重要なものは言論ではなく、寛容と自制心、手続きへの信頼といった暗黙の規範であり、それらは隠されたものである以上、敵対する者同士の権力闘争の中でも簡単に揺らいだりするものではないから。

問四 傍線部B「外皮を被せて虚飾で飾り立ててきた」および傍線部C「偽装を行ってきた」とあるが、こうしたことが行われてきたのはなぜだと考え

られるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **11**。

- ① 民主主義とは市民意識や法規範や立憲主義によって支えられているものだとする通念が、社会の中で力をもっていたから。
- ② 民主主義の真実は隠れた部分に潜在しており、その覆いを剥がせば民主主義が崩壊するということを、人々が自覚していたから。
- ③ 民主主義は政治的な理想の実現を目指す制度であり、そこで異なる意志が衝突すると理想は実現できないと思われることから。
- ④ 民主主義を支えている寛容と自制心、手続きへの信頼などは、それらを称賛する華やかな言説抜きには存在しえないものだから。
- ⑤ 民主主義はときに急進的な展開を見せるため、むしろ民主主義を後退させることでそうした事態を防ぐべきだと信じられてきたから。

問五 傍線部D「民主主義をkarou(ろう)じて機能させていた『何か』が崩れ去った」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **12**。

- ① 民主主義を支えている寛容と自制心、手続きへの信頼などの隠されていた価値が、むき出しになってしまったということ。
- ② それまで自明とされていた民主主義という政治体制が崩壊したことで、非民主主義的な政治家が登場してきたということ。
- ③ ポピュリズムを体現する政治家が誕生した結果、寛容や自制心、手続きへの信頼などが批判されるようになったということ。
- ④ 寛容と自制心という規範が力を失ったため、手続きへの信頼という観念が過剰なまでの役割を担うようになったということ。
- ⑤ ひとつの国の自生的な文化や歴史的経験、社会的な意識の中で形成される常識というべきものが、力を失ったということ。

問六

傍線部 E 「民主政治に対するある種のリアリズム」とあるが、そうした「リアリズム」をもつとはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **13**。

- ① 民主主義における政治は闘争的にならざるをえず、そうした闘争がむき出しのものにならなかったことなどかつてないという事実を認め、民主主義を醒めた目で見つめようとする事。
- ② 民主主義における政治の場では、理想を追い求めることなど無意味であり、目の前の現実はそのつど一つ一つ対応していくしかないのだと考え、そうしたあり方を実践していくこと。
- ③ 民主主義における政治とは本質的に敵対者間の権力闘争であるということを経験したうえで、そうした闘争が露骨に行われないようにすることができればそれで満足すべきだと考えること。
- ④ 民主主義における政治はモーレスに支えられているが、そのモーレスは国ごとに違っているため、民主政治の実現する国とけっして実現しない国とがあるのは仕方がないという現実を認めること。
- ⑤ 民主主義における政治の場ではむき出しの権力闘争が行われるが、そうした闘争を言論によってではなく、より直接的な方法で行うことこそ民主主義の本質だということを、あらためて自覚していくこと。

問七

筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

14。

- ① アメリカでもヨーロッパでもむき出しの民主主義がまかり通っているが、その根本的な原因は大きく異なっており、そのことから、モーレスと呼ばれているものが国や地域の歴史や文化や宗教意識によって異なっているということがうかがえる。
- ② 政治の世界でフェイクやポピュリズムが目立つようになっていくが、そうした状況は、人々が民意の尊重や自己主張の権利や平等への要求といったことを訴えなくなったからであり、今後われわれには、そうしたことをより強く主張することが求められる。
- ③ 民主政治を成立させるには寛容と自制心が必要だという暗黙の了解は、これまで民主主義国家に生きる人々の間で共有されてきたが、にもかかわらず手続きへの信頼という理念が軽視されてきたところに、今日の政治状況が生じてしまった要因がある。
- ④ 成立当初の民主主義においては客観的な真実や事実を重んじるという不文律が重視されていたが、急進的に展開してからの民主主義では真実や事実よりも主観的な価値が重んじられるようになっており、近年ではとくにその傾向が顕著になっている。
- ⑤ 今日ではアメリカでもヨーロッパでも政治におけるフェイクと呼ぶべき言論の横行が問題視されているが、民主政治における言論が特定の観点から語られるものである以上、そうした言論が事実か否かを問うことに問題解決のための実効性は見出しがたい。

Ⅱ 次の文章は、俳人の長谷川^{かい}權によるものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

数年前のことになるが、^A引越しを機会に持っていた本のほとんどを処分することにした。引越しとはいつでも同じ集合住宅の中で別の居室へ移るだけのことだから広くなったり部屋数が増えたりするわけではない。考えようによっては似たような空間へ移るのだから、今あるものをそのまま持つてゆこうと思えばできないこともない。しかし、夫婦の部屋にあふれ、居間にあふれ、廊下にあふれ、子どもの部屋にまで侵入しはじめた本の山を前にして今まで家族の非難をはねつけてきた私もようやく^⑦うんざりし始めていた。

そもそもなぜこうした事態に陥ったかといえば、身辺にある物の中で本だけを特別扱いしてきたことに原因がある。小さいころから本を大事にせよ、粗末にするなといわれ、子ども心にも本はほかの物とは違うのだなと思うようになった。そのうちに本は治外法権を獲得して徐々に増え始めた。

そこで引越し先に決まった新しい居室の壁いっばいに天井まで届く本棚を三つこしらえてもらい、そこに入らない本はすべて処分することに決めた。壁いちめんの本棚が三つといってもそんなに入るわけではない。持っている本の半分以上はあふれてしまう計算である。

五千冊売って涼しき書齋かな

權

ま、五千冊という数字は大袈裟^{おおげさ}であるが、そういいたくなるほどの本の山を近くの古書店に引き取ってもらった。それまで古本屋から本を買ったことはあっても売ったことはないから、はたしてこれで行くことになるのか見当もつかなかったが、恐る恐る予想していたとおり夫婦で顔を見合せて笑ってしまうほどのお金に変わった。世間からみればこれしきの値打ちの物に今まで場所を奪われていたことになる。

たしかに本は必要な人は千金を投げ打っても欲しいが、必要でない人には紙屑同然の代物である。いくら時間をかけ、お金を投じて買い集めた本といえども世間の人にとっては紙屑でしかない。まだ白い紙の方が役に立つ。本ほど人によって値打ちに差のある商品もない。

三つの壁に本がきれいに収まった新居に引越して、言い知れぬ解放感を味わうことになった。これこそ人間の居場所というものである。

大半の本を売り払って解放感を味わったというのは身辺がこのとおりすっきりしたからばかりではない。大事と信じて疑わなかった本を捨てる。これがなかなか爽快なのである。本を^a大事にしているということは本に縛られているということである。本は紙でできているから紙という物に縛られていることになる。紙であれ何であれ物に縛られるほど愚かなことはない。本を捨てるということは本の呪縛を破って自由になることだった。

うっかりすると忘れてしまいそうなことであるが、本はそこに書かれている内容が大事なのであって、一度読んでしまえばみな^bでしかない。

しかし、誰もがこの本という器、本のいわば抜け殻を本と呼んでいる。本を大事にするというのは実は本の抜け殻を大事に保存しているのである。心を動かされた小説などはまたいつか読みたい、また読むだろうという一時の迷いから本箱にしつかりと差しこんでおくのであるが、実際は一度読んだ本を二度三度と繰り返し読むことはよほどの古典のほかはまずないといっているだろう。いくら感動した本であっても本当はとっておいても仕方がないのである。感動した本であればあるほど、中身は心の中にしまいこまれているはずであるから、とっておかなくてもいいということになる。

物にこだわるなという訓戒は何も本ばかりではなく衣食住全般あらゆることに当てはまる。今、家の中を見わたただけでも、こんな狭い場所に机が五つ、ベッドが二つもある。引っ越しのときの整理をまぬがれた何年も着ない服がクローゼットの奥にはまだ何着もかかっているし、食器棚には博物館の保存室のように長い間、使われていない茶碗や皿が並んでいる。

こうした家具や服や食器がなぜ捨てられないかといえ、いつか使うかもしれないと淡い期待を抱いているからである。要るか要らないかわからない。

しかし、要るか要らないかわからないものは要らないものである。要らないとわかっていても捨てられないのは、かわいそうと思うからである。捨てるということに何とはなしに罪悪感を感じる。物に対して立てているわけである。こうしていつの間にか空間を物に占領されてしまえばかりか、ついには物によって心をがんじがらめに縛られて身動きがとれなくなる。

そこで、ある朝、目覚めて不要なものを一切捨ててしまう。

X

、予想に反して実際には何の不都合も起こらない。

Y

、広々とした空間がよ

みがえり、気分もさっぱりする。

しかし、物を捨てれば、現代の末期的な消費社会ではそれが大量のゴミとなって大変な問題になる。そこで、物を捨てることより賢いのは初めから物を買わないことである。

Z

まったく物を買わないのも難しいから、本当に要るものだけを買う、必要性和品質をよく吟味して買うしかない。

お金を吟味して使うということは実は一家庭内に留まらず、社会全体のあり方にかかわる問題でもある。民主主義社会では主権者は市民であるということになっている。そして、市民は選挙権を行使して指導者を選ぶことによって国や市町村のあり方を決める。実はこの選挙権のほかに市民が社会のあり方を決めるもっと有効な手段があつて、それがお金である。

考えてみれば **B** 資本主義社会は、お金に対してまことに従順な社会である。何が買われるかに敏感に反応し、お金の使われ方によって柔軟に姿を変え

る。消費者が自動車を買えば自動車関連産業がたちまち一大産業にのしあがる。パソコンを買えばパソコンの、携帯電話を買えば携帯電話の関連産業が躍り出る。反応はいたって単純である。

お金は選挙権と同じ、もしかするとそれ以上の働きをする。消費者は知ってか知らずにか、物を買うごとに社会のあるべき姿に対して一票を投じてい

ることになる。もし街によきものがあふれていけば消費者自身のお金の使い方がいいのであり、逆に醜惡なものがあふれていけば自分たちのお金の使い方がどこかゆがんでいると思わなければならない。

これは資本主義社会は物騒な革命など起こさなくとも、消費者がお金の使い方によって容易に変えることのできる社会であるということでもある。となると、選挙で一票を投じると同じように消費者はもつとお金の使い方には慎重でなければならない。安ければいいというものでもなく、逆に高いから安心というわけでもない。やたらと人に物を贈るのも、贈り物を安易に選ぶのもどうかということになる。

本当に必要なものかどうか、代金に見合う値打ちがあるか、今、買おうとしている物が社会にはびこるのを支持するかどうか、支持しないならたとえ一円であれ財布から出すべきではない。そこで一円を払えば、その人はよくないものに結果として支持を与えたことになり、それが何千人何万人と積み重なれば、その生産者は消費者に支持されたと勘違いしてもつとその商品の生産に励もうとする。有権者の意思であれ買収されたものであれ一票は一票であるように消費者の意図にかかわらず一円は一円だからである。

一方、支持するものに対してはその値打ちに見合うお金を投じなければならない。払うべきものに対してお金を出し渋るのもまた社会をゆがめることになるからである。

仏教は物にこだわるなと教える。仏像は自分自身が物としての運命を背負っていることをよく知っていて、やがていつかは自分自身も消滅するという大いなる悲しみと喜びのうちにたたずんでいる。

物にこだわるなという仏教の教えは実は恐ろしい教えである。仏像が物であるのと同じように人の肉体もまた物であるからである。とすると、たとえ親や子が死んでも嘆くことはない。さらに自分自身も物であるから、自分の死に臨んでも何も恐れることはない。こうして仏教は人や自分の死を従容として受け容れることを教える。口にするのはたやすいが、太陽と同じく直視するのは難しい。

C 俳句は十七音しかない。いいたいことの大半は潔くか嫌々ながらか、どちらにしても捨てなければならない。いいたいことにこだわっているのは俳句にならないからである。いいたいこと、いいかえると自分自身への^①こだわりの捨てることが俳句にとっては大事である。

同じことを人間の側から眺めると、俳句とはその人をその人自身から解き放つ型式であるということになる。人間は誰も自分自身に縛られて生きているのであるが、俳句には十七音という制約があるために俳句を詠む人は自分を縛る自分を捨てなければならない。

俳句という型式のこの特徴が俳句を詠む人の生き方に影響を及ぼすことがある。反対に、そうした考え方の人が俳句という型式に魅せられるということだろうか。

D 大寒の埃の如く人死ぬる

たかはまきよし
高浜虚子

虚子が昭和十五年（一九四〇年）一月のある句会に出した句である。このとき、「大寒や見舞に行けば死んでをり」という句もいっしょに出した。句集ではこの二句が並んでいる。二つを合わせて想像すると、病氣の人を見舞いに行ったら埃が風にさらわれるようにすでに死んでいたというのである。人の死に際して「埃の如く」とは世間の生ぬるい常識からすれば穏やかでない。

病氣見舞いにゆくくらいだから、その「人」とは虚子の知り合いだろう。句集に収めれば句は遺族たちの目にも触れる。それを承知のうえで虚子はこの句を句会に出し、句集にも入れた。それができたのは「埃の如く」が何も故人をゴミのようにといつているのでもなく、おとしめているわけでもなかったからである。

この「埃の如く」の「埃」とは仏典に記された宇宙に遍在する無数の塵ちり、それ自体一つ一つがまた広大な宇宙である塵である。人が死ぬと無数の塵となつてあまねく宇宙に散らばる。宇宙のいたるところで今も刻々と起こりつつある無数の破壊と無数の誕生、変転留まるところを知らない物の姿の一つを虚子は余計な情を排して描いた。この非情こそが遺された者には同情や慰めよりはるかに深い安心である。「埃の如く」が **d** をかもしたなどという話も聞かないところからすると、故人の遺族たちもそれがわかっていた。

（長谷川權『俳句的生活』）

問一 傍線部⑦「うんざり」・④「こだわり」を言い換えたものとして最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

解答番号は ㉞ — **15**、① — **16**。

- ① 諦念 ていねん
- ② 拘泥
- ③ 傾倒
- ④ 億劫 おくくう
- ⑤ 辟易 へきえき
- ⑥ 無聊 ぶりよう

問二 空欄 **a** **d** に入れるのに最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じものを繰

り返し用いてはいけません。解答番号は **a** — **17**、**b** — **18**、**c** — **19**、**d** — **20**。

- ① 反古 ほんこ
- ② 義理
- ③ 小心
- ④ 後生
- ⑤ 私腹
- ⑥ 物議
- ⑦ 蛇足
- ⑧ 巧言

問三 空欄

X

く

Z

に入れるのに最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じものを繰り返してはいけません。解答番号は X | 21、Y | 22、Z | 23。

- ① というのはもの ② そうしたとしても ③ いやしくも ④ それどころか ⑤ なぜかといえば

問四

傍線部 A 「引越しを機会に持っていた本のほとんどを処分することにした」とあるが、本や物を捨てることについて、筆者はどのように考えているか。その説明として誤っているものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 24。

- ① 本を捨てるということは、本というものに縛られていた自分を解放することでもあり、そこにはある種の爽快感がともなう。
② 身のまわりにある品々のなかでも本は特別な価値をもつという考え方があがるが、そうした考え方は必ずしも正しいとはいえない。
③ 本の価値を金銭ではかるといふこともできないわけではないが、そうした金銭的価値は相対的なものでしかない。
④ 本はできるだけ捨ててしまった方がよいが、読むたびに違った感動を与えてくれるような本に限っては、捨てずにおくことが望ましい。
⑤ 捨てられる物に対してかわいそうだという気持ちが生じることもあるが、そうした感情は結果的に自分自身を束縛することになりかねない。

問五

傍線部B「資本主義社会は、お金に対してまことに従順な社会である」とあるが、こうした話題を通じて筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 25。

- ① お金とは大きな力をもったものであり、資本主義社会はその力に従って営まれているといえるが、同じように私たち現代人も、お金の力に従うことなしには日々の生活を営んでいくことができないということ。
- ② 資本主義社会において、お金を吟味して使うということは社会全体を変えることにもつながるのだから、お金を使うという行為には、選挙での投票には遠く及ばないものの、私たちが社会に一票を投じるのに近い意味があるということ。
- ③ 資本主義社会においては、代金に見合う値打ちのないものも売られているが、そうしたものに金を払うことが社会を悪しき方向に向かわせる以上、私たちは、どんなものでも少しでも安く買うように心がけるべきだということ。
- ④ お金とは私たちの生きている資本主義社会を支配しているものであり、私たちは、そうしたお金で物を買うという行為が単に個人的なものではなく社会に大きな影響を与えているということに、もっと自覚的であってよいということ。
- ⑤ 私たちはお金に支配されており、そのお金は資本主義社会に支配されているが、そうしたことを考えれば、私たちとお金との健全な関係を取り戻すために、まずは社会を変革していくことが必要だとわかるはずだということ。

問六

傍線部C「俳句は十七音しかない」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 26。

- ① 仏教では物にこだわるなと戒め、俳句では字数にこだわるなと教えることからわかるように、無意味な物を積極的に捨てていかないと、人は戒めを受けるものだということ。
- ② 少ない字数の俳句を作ることとは、こだわりを捨てて自由になることにつながり、そのようにして自由になった者は、やがて十七音という形式からも自由になるということ。
- ③ 十七音という限られた字数で何かを詠もうとしていくなかで、人は自分のこだわりを捨てざるをえなくなるが、そのことは自分自身が自由になることにもつながるということ。
- ④ わずか十七音で俳句を読もうとすると、いいたいことを潔く捨てざるをえず、いいたいことを捨てるのをためらうところのある者は、俳句の奥義にたどり着けないということ。
- ⑤ 人は自分で自分のことを束縛してしまいがちだが、俳句も十七音という形式によって自らを束縛する文学であり、俳句のそうしたところが人を惹きつけるのだということ。

問七

傍線部D「大寒の埃の如く人死ぬる」とあるが、筆者はこの句をどのようなものとして捉えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **27**。

- ① 自分自身を束縛することは好ましくないという考え方をもった俳人によって作られたものであり、身近な者の死に対しもっと自由に向き合うべきだと主張することを通して、遺された者への同情と慰めを表現している。
- ② 亡くなった人間を埃に喩^{たと}えるなど、一見すると冷たく非情な句のように感じられるが、実はその奥底には深い情愛がこめられており、親しい人を亡くした者すべての心に訴えるような普遍性をもっている。
- ③ 死に臨んでも恐れることはないとする仏教の教えを体現した句であり、宇宙に遍在する無数の塵の一つ一つと、一人一人の死者とを対比させることで、破壊と誕生とを繰り返し続けるこの世の真理を説いている。
- ④ 遺族たちの目に触れることを承知のうえで句会に出された作品であり、亡くなった者をあえて埃に喩えることで、人の命には限りがあり、その死を悔やんでも取り返しはつかないという真実を示唆した句である。
- ⑤ 人や自分の死を動じることなく受け容れよという仏教の教えにも通じるものであり、世間一般の常識や余計な情にとらわれず、巨視的な観点から、万物の流転する世界のなかでの一人の人間の死を描き出している。

問八 本文についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **28**。

- ① お金と資本主義社会との関係について述べた部分などもあるものの、本文全体の根底に流れているのは、「捨てる」ことが私たちに束縛からの解放をもたらすという考え方である。
- ② 本を捨てるという自身の経験を話の糸口にして、現代社会ではさまざまなものが捨てられているが人の命は大切にしなければいけないという主張が、さりげなく語られている。
- ③ 本を捨てること、資本主義社会とお金、仏教、俳句といったさまざまな具体例を挙げながら、そうしたものをすべて包みこむ宇宙の神秘という主題を提示した文章である。
- ④ 「捨てる」という言葉が比喩的に用いられており、持ち物も俗世間も捨て俳句の道に邁進していこうと決意している筆者の姿が、読者に印象づけられるような文章となっている。
- ⑤ 本を捨てることは意味あることだがお金や命を捨てることは意味がないという教訓を示すこと通じて、「捨てる」という行為の功罪という奥深い問題が示されている。

2025 年度 マネジメント学部 一般選抜 A 日程

国語（マークシート式・60分・100点）

大問	小問	細分	正解	配点	大問	小問	細分	正解	配点
I	問一	1	①	2点	II	問一	15	⑤	2点
		2	③	2点			16	②	2点
		3	②	2点		問二	17	④	2点
		4	②	2点			18	①	2点
		5	③	2点			19	②	2点
	問二	6	⑤	2点			20	⑥	2点
		7	④	2点		問三	21	②	2点
		8	①	2点			22	④	2点
		9	②	2点			23	①	2点
	問三	10	④	7点		問四	24	④	7点
	問四	11	①	6点		問五	25	④	6点
	問五	12	⑤	6点		問六	26	③	6点
	問六	13	③	6点		問七	27	⑤	6点
	問七	14	⑤	7点		問八	28	①	7点